

観光化における歴史の再構成と地域住民の抵抗
—中華人民共和国雲南省のペー族の新華民族旅游村の事例—

Reconstruction of History in the Tourism Development
and the Locals' Dissent:

A Case of the New Chinese Ethnic Village of
the Bai in Yunnan Province of China

雨 森 直 也

要 約

雲南省の新興観光地の一つで、解放後に作られた行政村新華民族旅游村はペー族の3つの自然村からなっている。この重要な土産物である銀細工の歴史は調べた限りではたかだか200年である。しかし、地方政府は観光開発の一環として銀匠の歴史を1,000年というように捏造している。代々銀匠をしてきた人たちはその捏造を否定している。本稿は、観光客、プロデューサー、地域住民という三つの立場から、少数民族の観光開発のあり方を考察している。

Abstract

New Chinese Ethnic Tourism Village, which is one of those newly created tourist villages after the Revolution, consists of three natural villages of the Bai people. The silverworks as one of the most important souvenirs here has a history of merely 200 years as far as the author looked over. However, it seems that the local government has invented its history as 1000 years in the course of the tourism development. Those who have been silversmiths for generations deny such a long history of silverworks here. In this article, the author attempts to examine the way of ethnic tourism development from three aspects: tourists, producer, and local residents.

キーワード：エスニック・ツーリズム、銀匠、ペー族、中国

Key words : ethnic tourism, silversmith, the Bai, China

はじめに

中国では、改革開放以降およそ30年を経た現在まで、新たな観光地が次々と生み出されている。とくに90年代以降開発された新興の観光地は、80年代初頭から存在する有名な観光地に少しでも肩を並べようとする多くの努力が見られる。加えて、それらの新興の観光地では、その場所をより魅力あるものにするために何らかの工夫が試みられることが多い。

本稿では、これまでも広く用いられている概念であり、また、とくに遠藤が用いている「ツーリスト（観光客）」、「プロデューサー」、「地域住民」の3つの立場に分けて調査報告を行いたい（遠藤 2005：15～21）。とくに、中国では観光地を演出するプロデューサー（観光地の大きさや重要さによって係わるレベルは異なるものの）として地方政府が大きな役割を演じていることが多い。地域住民は、観光による金銭的な利益は少なからず受け取ることができても、観光政策に積極的に係わるということはありません。本稿における事例もそうした観光地の一つであることは間違いない。ただし、地方政府による演出に対して、地域住民による小さな抵抗も見られるため事例として取り上げたい。

本稿における調査対象地は、観光開発計画が村の話題となってから10年を経していない新興の観光地と呼んで差し支えない雲南省の「新華民族旅游村」である。おもに地域住民から聞き取った内容によって構成する。調査は、2007年8月に実施された。調査対象は、新華民族旅游村の村人である。調査対象者に対して、筆者はほぼ中国語を用いて、とくに村における銀匠の歴史を中心に質問した。また、新華村村公所などで得た資料も一部利用される。

1. 新華民族旅游村

新華民族旅游村（以下、「新華村」）は、鶴慶県城より北北西に5 km ほどのところにある。新華村の総世帯数は、1149戸、人口は、5257人（2006）¹⁾ である。

2007年の時点で、この村は観光村ではあるが、入場料を徴収しておらず、観光客は無料で村を訪れることができる。新華村は、南邑（1777人、374戸）、北邑（1901人、423戸）、銅常河（1805人、312戸）の3つの自然村から成り立っており、すべてペー族の村として自他共に認識されている。他方、新華村に対応するペー語での村名はなく、自然村に対応するペー語の呼称のみが存在している。つまり、中国解放以前は、3つの自然村はそれぞれ別個の村であったからである。

新華村において観光開発が始まったのは、現地の人によれば1998年のことである。それ以降、村を観光開発するために、村内の整備や村までの交通アクセスの整備などが始められた。とくに交通アクセスについては、開発以前、新華村から鶴慶県城までの道は、車一台が何とか走ることのできる細く、舗装されていない道路だったが、石畳（アスファルトの部分もあり）でおおよそ8mの大きな道路に拡張・整備された。道路の拡張によって、村は、観光業以外の諸側面でも大きく変貌を遂げることになった。

加えて、これらの観光政策に大きくかかわることになった人物が登場する。南邑村出身の元実業家S氏である。2001年に彼は、村の8m道路に面する場所などにおおよそ500畝（1畝=0.67a）の土地を買い受け、観光開発を始める。彼は、土産物売る施設（村人はそれを「石塞子」と呼んでいる）、ホテル、99mの巨大な仏像、南邑村の中に水路を張り巡らすなど、新華村、とくに南邑村を中心に大規模な観光開発を試みた。しかし、彼は、これらの観光事業を始めて間もなく、観光とは関係ない部門で大量の赤字決済を出し、所有する大半の会社や資産を失うことになり、土産物売る施設以外は、ほとんど未完成のままとなった。すでに完成していた土産物売る施設は、政府によって多くの部分を買いとられ、現在では、「石塞子」の売り上げから、夫婦合わせて月に6000円をもらうのみになり、有名無実の存在となった。

現在の新華村を訪れる観光客は、ほとんどすべてが日帰りの観光客である。個人観光客は少ない。最も多い形態は、観光バスに乗ってやってくるパッケー

ツアーの観光客である。彼らは、中国国内はもとより諸外国からも訪れている。彼らの村での滞在時間は、30分程度の短い時間である。とくに7月末から8月中旬までの観光客が比較的多く訪れる時期には、1日に8000人が訪れているという²⁾。これほどの急激な発展のからくりは、観光客を呼び込むために「石塞子」が、観光会社ないしは観光客を連れてきた運転手に対して、1人当たり2元のリベートを与えているためである、と事情に詳しい人物は証言している³⁾。つまり「石塞子」は、パッケージツアーによく組み込まれている土産物店と同様であり、観光客はその意思に関わらず訪れることになる。しかし、単なる土産物を売る施設ではなく、有名な観光地である大理（古城）と同じペー族の村にあるということに意味があり、「石塞子」の売り上げは、新華村全体の経済総収入3748.8万元⁴⁾を優に超え、およそ6800万元（2007年1元≒15円）（2006年）⁵⁾とかなり好調である。

他方、観光バスで訪れる観光客の一部は「石塞子」から出て、南邑村や黒竜潭を見に行くことも少なくない。ほとんどの村人は、「石塞子」の中に入って勝手に商売はできないので、個人観光客や「石塞子」から出てきたツアー客に対して、さまざまな商売を試みている。

2. 銀匠の歴史と観光化に伴う歴史の変化

当初、筆者が村で聞き及んでいた新華村の銀匠の歴史は1000年である。この点に関連して、調査時、銀加工を行っている村人の妻から「なぜあなたは、何世代前から作っているのか尋ねないのか。」と逆に質問された。中国人の調査者や観光客は、この点をよく村人に訊ねるという。つまり、中国人調査者や観光客は、新華村の銀匠の歴史に対して、長い伝統を求めていることが見て取れる。さて、地元政府である鶴慶県政府が編纂に深く関わっている『鶴慶風物誌』においては、つぎのようにある。

新華村には悠久の民族手工芸品加工の歴史がある。早くは唐代の南詔国の時期に、ここでは民族手工芸品の製造を始めている。代々伝わり今に引き継がれている。新華の人は歴史上すでに“鶴川匠人”として内外に有名である（李森2004：8）。

ここから読み取れることは、1000年ないしはそれ以上の歴史があるということである。こうした歴史を証明できる史資料はどこにも示されていない。銀匠かどうかには触れず、伝統手工芸品加工という用語を用いて、1000年の歴史を説明している。また、鶴川匠人は、特に新華村の人々を指しているわけではない。単に鶴慶と隣の県である劍川の人を指し、多くの工匠がいることを述べたにすぎない。

次に、南邑村人であり、新中国以前に祖父が銀匠を行っていたC氏（57）の話によれば、少なくとも新中国が成立する1949年前後には、2家すなわち、聞き取りを行ったC家ともうひとつはL家⁶が銀匠の家として存在していた。C家の場合、彼の祖父が、民国期である1940年代にタイやミャンマーとの貿易を行っていたところに現地で見えた技術を、見よう見まねで始めたという。また、もうひとつのL家では、C家よりも相当前に銀を加工する技術を持っていたが、L家は、この技術を門外不出とし、家族以外の者には一切知らせずいた。彼らは長年の独占的技術により、とても裕福であったという。ただ、このL家は、中国共産党による1949年の革命により、その財産と工具を没収され、その技術を失ってしまった。ただ、L家による銀匠の歴史は古く、C氏の話によれば、200年前後はあるかもしれないということである。

他方、上記のC家は、民国末期には近い親族ではない人も弟子にし、銀製品を生産し始めていたが、まもなく革命が起こり、家庭で秘密裏に作るのみとなってしまった。ただ、銀製品を作り始めて間もなく、裕福でもなかったため、彼らは共産党による非難は避けられたようである。その他のほとんどの家々では、当時、銀匠はおらず、金属製の鍋などの日用品の修理などを主に行う小炉

匠がほとんどであったという。

他方、新華村は、中国解放以後の行政村の1つであり、先にも述べたが、本来のこの地方のペー語には新華村に相当する語彙はない。しかし、行政村が成立したことによって、中国解放後の人民公社における生産大隊においても新華大隊（鳳凰大隊（村）と名乗っていた時代もある）として組織されていった。この過程で、それ以前の農地の所有は、共産主義政策の下、完全に平等にはなったものの、新華村では、結局貧困の共有にしかならなかったようである。現在村で観光客向けに食堂を営んでいるH氏の息子（20）によれば、彼の父は「当時（文革期）は白米も腹いっぱい食べられず、トウモロコシの粥をたべていた。この食事のためか、よく腹を壊した」。また、彼自身の記憶として「改革開放後、満足に食べられるようになって、わたしのおじいさんは、ご飯を残すとよく叱っていた」

これらの原因は主に、新華村の1人当たりの農地が、村公所の2006年末の資料で、0.56畝という零細な農地規模にあるということである。他方、観光開発によって、500畝の田畑を観光拠点に転換したと複数の村人は言うが、人口5000人余りの新華村では1人当たりにすれば、およそ0.1畝に過ぎない。周辺他村では、1人あたり少なくとも0.7～1.1畝程度の農地があり、村によっては、自主的に開墾した田畑もあり、それらは上記の平均値に含まれないため、より多くの農地が経営されているということになる。よって、新華村の農地は1人当たりにすると、周辺の村々と比べて少ない。これは、文化大革命期の農村では、農業が生活に直結するため、とても満足な生活ができる状態ではなかったことを意味している。

このため、文化大革命の嵐が落ち着きを見せ始めた1969年から、南邑村の人々は、当時の法を犯すと知りながらも、家族を守るために秘密裏にじょじょに家を出て、おもに西双版纳や徳宏などを中心とした少数民族が多く居住する地域に行き始めた⁷⁾。こうした証言は、1人だけでなく、南邑村の50～60歳前後の男性から、少なからず聞くことができた。小炉匠は、金属を扱う職業で

あったため、銀匠への転換が比較的容易であったと考えられる。だが、銀匠は細かい細工を伴うため、なお修行も必要であり、現在でも村人はこれらの職業を、同様の職業ではなく、別なものとしてとらえている。ただ、当時は新中国以前に銀匠であったC氏の祖父の弟子であったほんの一部の人を除いては、誰に教えてもらうわけでもなく、ほとんどの人が、文革期や文革終了後間もなく、ひたすら自分たちでこれまでの小炉匠の技術を工夫して、それぞれの弟子とともに銀の加工技術を築いていったようである。ある村人は、「三年も銀をたたいていれば、なんとかできる」と冗談交じりに言う。

これが、村人の述べる銀匠の歴史である。つまり、現在南邑村に存在する銀匠の歴史は200年程度のものかもしれないが、中国解放のために技術が断絶してしまったL家および、民国末期から始めたC家を含むほんの一部の人を除き、大部分の銀匠の歴史は、おおむね40年程度だということが見えてくるのである。

また、1999年に出版された鶴慶県における旅游業の企画書である『鶴慶旅游』では、新華村を取り上げた部分が非常に少ない。他方、新華村は、黒竜潭を鑑賞するための重点旅游区として、開発の筆頭に挙げられている（管寧生など1999：105）。つまり、新華村は、黒竜潭という自然景観の存在で注目され、開発されてきたことを示唆している。また、この村における主要産業である銀製品に関する記述では、企画書の段階では、具体的な村の名前はあげられていないが、銀の代用品として使われる白銅については、新華村のみならず、周辺の村の記述もある。他方、記述に見られた周辺村の1つである羅偉邑行政村のことを筆者は少し調べたが、おもに鍋などを作る銅匠や小炉匠がおり、現在では、銀匠も少なからず存在するものの、新華村同様の時期が少し遅れて銅匠や小炉匠から転換したようである。つまり、企画書の段階では、これら銀製品に関する記述にみられるのは、“伝統”という文字だけである。また、『鶴慶旅游』においても、現在言われているような1000年の歴史を証明する資料も提示されていない。

このような銀匠と小炉匠を連続させた1000年の歴史に対して、村人自身はか

なり疑問を抱いている。先の情報提供者であるC氏は、この村で銀匠を始めたのは2家だということを、筆者が彼の家を訪れた際に、率先して名乗り出た。また、50～60歳ぐらいの銀匠や老眼のため少し早く引退した元銀匠も、歴史についてきちんと説明した。それらの発言の中で、1000年の歴史を肯定するような発言はほとんどなかった。若い人よりも銀匠の第1世代と言える50～60歳前後の男性が、こうした1000年の歴史をよく否定する傾向にあった。つまり、銀匠第1世代が当時の法律を顧みず、家族を守るために、そして生活のために行った勇気ある行為を1000年の歴史にすり替えられたことに対する抵抗が、彼らの発言にうかがわれる⁸⁾。

3. おわりに

このような歴史の再構成は、観光だけでなく、多くの場面で見られる現象である。ただ、今回の場合に特徴的なことは、村人がこの1000年の銀匠の歴史をあまり肯定して見せたりしようとしなかったことである。むしろ、地方政府（本稿の場合は鶴慶県政府）主導の観光開発のために創られた歴史に対して、銀匠を始めた第1世代を中心に違和感を覚えていた。

他方、中国人調査者すべてが歴史の再構成に気付いていないわけではない。孫瑞・潘建華は次のように指摘している。ほんの短い10数年の時間の中で、遠い祖先の“小炉匠”を一つの新しいレベルにまで大きく引き上げた（孫瑞・潘建華撰 2004：140）。しかし、これらの指摘には少なからず誤りがあることは、否定できない。つまり、新華村、とくに南邑村の銀匠が文革期に形成されたこと、また、現在でも南邑村をはじめとする新華村では、減ったものの小炉匠がなお存在しており、この村のペー族の間では、銀匠とは異なる職業だと認識されていることである。歴史の点に関しては、上記の研究者らもおそらく知っている。しかし、現在では政府によって公式に否定されている文革時代のこととはいえ、貧困のために法律を犯してまで行った行為を、中国国内の刊行物に

において指摘することを避けたと考えられる。

最後に、これらの観光開発における歴史の再構成は、地方政府というプロデューサーのもとで、村人の認識と異なった次元で行なわれているため、村人の支持を得られていない。他方、「石塞子」の大株主であり、かつプロデューサーの地方政府は、観光による金銭獲得にたいへん熱心になっている。そのことによって、今後、地域住民の認識とはかけ離れた歴史の再構成が加速していくであろうと考えられる。

註

- 1) 新華村村公所編『村公所年報(2006)』(出版社・頁数記載なし)、2007。
- 2) この数字は、村の入り口で、金銭の支払いのためにチェックされた入村者数である。そのため、個人旅行者の多くはこの数字に含まれていない。
- 3) この部分は、政府が現在この方法を禁止していることもあり、非常にセンシティブなため、万が一に備え、情報提供者のイニシャルも伏せる。
- 4) 注1)と同様。
- 5) 売り上げの数字は、「石塞子」の労働組合副主任の証言に基づく。
- 6) 現在、このL家は村に居住していない。聞くところによれば、家族は麗江、昆明などに住んでいるという。2007年8月の時点では、鍵のかかった古い建物が存在するのみである。
- 7) 現在では、チベット族居住地区における出稼ぎが圧倒的に多いが、当時は、全くいなかったわけではないが、多くの人がこの地を避けていた。その理由として、当時は、チベット動乱にともない、あらゆる面で不安定でとても商売ができるころではなかったからである。他方、前稿、文革期を除いて表現した部分は、確かに文革期に始めた人物も今回の調査で数少なからずみられたが、文革後銀匠を始めた人も多い。
- 8) 銀匠第1世代のC氏(63)は、筆者が「このようなこと(当時の法律を犯して家を出て行ったこと)は怖くなかったのか」と質問したら、「怖くない」と悠然と言い、銀匠の歴史を語ってくれたことに筆者は今でも感銘を受ける。

参考文献

(1)中国語文献

管寧生など

1999『鶴慶旅游』雲南大学出版社

李森編著

2004『鶴慶風物誌』雲南民族出版社：7～9頁。

孫瑞・藩建華撰文

2004『白族工匠村』雲南人民出版社

新華村村公所編

2007『村公所年報(2006)』(出版社なし)。

(2)日本語文献

須藤廣・遠藤英樹

2005『観光社会学—ツーリズム研究の冒險的試み』明石書店